THE YOMIURI SHIMBUN
讀賣新聞
2009年(平成21年)
2月19日木曜日

在学中にＩＴ起業の工学博士

納得の自分主義 一貫

自社開発の企業分析システム「ユーレット」を説明する西野さん（13日、千代田区のメディネットグローバルで）＝小林佳代撮影

枝川公一の
東京ストーリー

小学生のときの給食当番。ポテトサラダが出る。おいしそう。たくさん食べる手はないか。考える。できるだけ残しておこう。それで、自分が真っ先におかわりすればいい。こうして7回おかわり。大成功。

もっとも、次回の当番では、パンやフライを配る係に回されたけれど。

西野嘉之さん(34)は、ＩＴ企業「メディネットグローバル」（千代田区）を起業し、現在、代表取締役を務める。

生まれ育ちは、岐阜県の田んぼと山と川のなか。給食と学校大好き少年で、幼稚園から高校まで、文字どおりの皆勤賞。高校への通学に往復2時間半。自転車2台と電車を乗り継ぎ。宿題は車中で。ハンパじゃない。

上京して、推薦で慶大理工学部へ。受験に疲れた都会の子とはちがい、勉強力があふれかえっている。西野さん、鬼のように学ぶ。

学生のとき、すでに会社経営を手がけていた。

昼間はスーツにネクタイで顧客をまわる。一間きりのアパートへ戻ってくると、夕方から明け方まで、今度は論文書きに没頭する。布団に横になれない夜が当たり前。1週間ずっとウトウトするだけの日がつづくのも珍しくなかった。

「私にはお金はない。でも、あなたが必要と考える教育は、何があってもしますからね」とは、母親から言われつづけたこと。

こうして大学院に進んだ西野さん、近来まれな快挙を成し遂げる。

博士課程では、通常3年間の在籍を経てから、晴れて博士になる。ところが、西野さんは論文の業績が認められて、2年で修了してしまった。

かつて田んぼを斜め跳びして遊びまわっていた少年は、特例として「飛び級」付きの工学博士になった。

パソコンがまだ珍しかった頃、西野さんはおもちゃのようにして遊んでいた。人間の手間を省いてくれるところに惹かれた。やがてインターネットが広く受け入れられて、情報がいっそう威力を発揮するようになる。

西野さんの会社は近年、「ユーレット」という情報サービスを手がけている。ネットをフルに使い、上場会社の企業価値をワンクリックで分析する試み。あくまで情報にこだわる。

「私は、自分の目標を持つようにしている。賞を競い、対外的な評価を受けるよりも、自分で納得したい。大手企業に頼らずに起業したのもそのため」

西野さんの自分主義は、味覚にも及ぶ。他人の感想も、値段の高い安いも関係ない。子どもの頃食べた味かどうかだけで、うまいかまずいかを決める。大根の甘味も、ピーマンの苦味も。トマトの甘さも。

（ノンフィクション作家）